

# 別冊 おおいだものがたり

## ～資料館資料編～

### ■田能村直入筆『群鳥図』

『日本遺産「山寺と紅花」追加認定記念企画展大石田に遺る近世絵画』展より

ただ今資料館で開催中の『日本遺産「山寺と紅花」追加認定記念企画展 大石田に遺る近世絵画』展から、今回は田能村直入筆『群鳥図』をご紹介します。

田能村直入（文化11・1814～明治40・1907）は、田能村竹田にその才能を見出され、養嗣子として田能村姓を継いだ文人画家です。明治初年には、京都府画学校（現京都市立芸術大学）設立に関わり、開校にあたっては摂理（校長）となったほか、富岡鉄斎らと日本南画協会を設立し、南画振興に尽力しました。

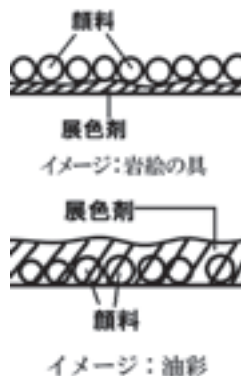
南画あるいは文人画というと、水墨を基調とした山水画が中心ですが、中には極彩色の花鳥画なども含まれます。今回取り上げる『群鳥図』もこの系統の作品で、鮮烈な色合いに驚かされますが、この発色の良さは日本の伝統的な画材である岩絵の具の特性に由来しています。

水彩や油彩、アクリルなど、絵の具には様々な種類がありますが、その主成分は顔料と展色剤です。顔料とは岩石などの鉱物を砕いた色の基となる粉末ですが、顔料には接着力がなくて、支持体（紙やキャンバスなど）に色を乗せても定着しません。そこで必要になるのが、顔料どうしや顔料と支持体を接着させる展色剤です。この展色剤の違いが絵の具の種類の違いで、水彩絵の具にはアラビアゴム、油彩絵の具には乾性油が使われており、岩絵の具は、膠で溶くことで接着力を持たせます。水彩や油彩絵の具の展色剤が顔料の粒子全体を覆うのに対し、膠は点と点で接着させる（イメージ図参照）ため、顔料が持つ本来の色が表れることとなります。点のみで接着していることで脆弱であるという難点があるものの、良い顔料を用いて大切にされてきたものは経ても鮮やかな色を失いません。

また、顔料としての岩絵の具には、粒の大きさによって色の濃淡が異なるという特徴もあります。細かい粒子ほど乱反射が多く白っぽい色になるので、同一鉱物由来の顔料でも、粒の大きさで色が細分化されています。そのため顔料の大きさが均一な水彩や油彩で描かれた作品に対し、岩絵の具による作品は同じ支持体上に大小さまざまな粒子の顔料が用いられることとなります。これにより見る角度や遠近でそれぞれの顔料の反射が異なる変化をし、実際に使用された色数以上の色を感じさせるのです。

あらためて、『群鳥図』を見てみます。画面下方の水の中にはオシドリやマガモ、鶺鴒の他、岸边にはサギやウズラ、さらにキジやガチョウの姿も見えます。画面左側に立つ木の枝の上や空中には、雀に鶯の小禽たちやフクロウといったおなじみの鳥だけでなく、カラフルな各種のインコやオウムなど、舶来の鳥たちが所狭しと遊んでいます。その一つ一つが博物画といって良いほど精緻で、いきいきとした表現からは、今にも鳥たちの鳴き声が聞こえてきそうなほどです。華やかな色彩表現を支える上記の岩絵の具による特性は、写真になると均一な平面になってしまうため、実物を見ることでしか味わえないものです。ぜひ資料館で豊かな色合いをお楽しみください。

『日本遺産「山寺と紅花」追加認定記念企画展 大石田に遺る近世絵画』展は 12月8日（日）まで



町の人口 令和元年 11月1日現在		
世帯数	2,340戸	(-10)
総人口	6,959人	(-26)
男	3,420人	(-9)
女	3,539人	(-17)
(10月中の異動)		
出生	3人	転入 5人
死亡	15人	転出 19人

※この数字は外国人数も含めた数字です。

### 楽がき帳

すっかり寒くなりました。いつの間にか葉山が真っ白になっています。もうそろそろ大石田町にも雪が降りますね、もしかしたらこの広報紙が出るころは初雪が降ったあともかもしれません。気になる今年の雪の量ですが、9月下旬に気象庁が出した長期予報によると、この冬は全国的に平年並みか平年より気温が高く、日本海側の雪も平年並みか平年より少ないとのこと。穏やかな冬だといえますね。

さて、令和元年も残すところ1か月あまり、一年を振り返る季節になりました。今年には胃腸が大荒れ的一年でした。3月に急性胃腸炎にかかり一週間ともに食べられなくなる、8月に夏バテで食欲をなくし体重が5キロ近く落ちる、10月に胃カメラを飲みピロリ菌に感染していることが判明。今はすっかり良くなりましたが、忘年会シーズンは食べ過ぎ飲み過ぎに注意したいと思います。(あ)